

安全・安心まちづくり

『江戸の大地震対策』 その三

講談師 一龍斎貞花

安政江戸地震は、安政二年（一八五五）十月二日夜十時頃、マグニチュード六・九、震度六と推定。

一四〇二、死者四二九三人、負傷者三七五九人。

前年十一月四日東海、十一月五日南海と各地で連続発生し、総称安政地震といわれている。

震災復旧対策は、被害大名に対し幕府から無利息一〇年賦で貸与。最高額は、屋敷消失の内藤紀伊守、屋敷倒壊の阿部伊勢守の一万両（両

者老中）、最低額は寺社奉行安藤長門守、大坂城代土屋采女正二千両。旗本には無利息一〇年賦、御家人には被下金くだされぎんが禄高に応じて支給され、総額八万八千両余り。町方には

最下層の窮民、日雇者に対し、救小屋（仮設住宅）六カ所、安政二年十月五日（三年正月末、收容人員不明。十月二八日の五カ所、收容人

員二六九六人。焚出たきだし七日間。延人員二〇万二四〇〇人。救米九日間

三八万二〇〇人。民間では施行せきやうと呼ばれる富商による一般町民への救済、総額二万五千両余り。上に厚く下に薄い、いつの時代も同じです。

参勤交代中のこと、藩の急飛脚などで家族の安否が国元へ報され、津軽藩弘前へは十日後、九州各藩へは十一、二日後伝えられた。

民間へは、藩飛脚が宿屋、街道での問屋を通じて。江戸の商人も早飛脚で、京・大坂へは四日後に伝えられた。情報伝達じょうほうに定飛脚、瓦版が

活躍。情報の大切さです。江戸の職人が災害復興景気でおおいに潤ったという。大工さんなど建設関係者、これも同じです。

藤田東湖圧死

十月二日夜、来客を玄関で見送り屋敷に戻ろうとしたとき、グラグラツときた。老母を助けて庭へ出たが、老母が火鉢の火を消すのを忘れたと

いつて家に入った。介添えして部屋へ。するといきなり鴨居が落ちてきた。老母をかばって鴨居を肩でささえていたが、更に大きな地震に襲われ圧死。後楽園の水戸藩邸にて、藤

江戸地震は、発生後三七・八カ所で火災発生。しかし十万人余りの焼死者を出した大正の関東大震災と違って、焼死者より建物倒壊による圧死者が多かった。大名屋敷被害一一七藩、死者一八六〇人。旗本・御家人屋敷被害二万七五四件、幕臣総数の約八割。死者不明、町方の倒壊家屋一万四三四六軒。土蔵

田東湖五二歳の生涯。死を知った橋本佐内は「後世藤田東湖二人なし」と言つて号泣。地震は幕末の大きな人物の命を奪つたのでした。

津波と日露交渉

幕末の日露和親条約は、安政元年十二月二一日調印された。日本側代表の川路聖謨は、成功の原因は、「一に公儀の御威光、二に關係役人の苦勞、三に津波」と書いている。

川路がロシア代表プチャーチンと二回目の交渉に入つた安政元年一月四日午前九時ごろ、グラツときた。大きなゆれに「地震だ」、交渉を中止しあわてて外へ飛び出し、裏山へのぼつた。たちまち大津波が押し寄せ、人家も、つないであつた船も押し流され、流石の川路も、「恐ろしいとも、なんともいいようがない」と書いている。

この津波で、ロシア側が乗つてきたディアナ号が大破。日本側の協力

で修理したが、出航後沈没してしまつた。船がなければ帰国出来ない。

「代りの船を新に造らなければなりません。何卒ご協力願いたい」「わかりました。喜んで協力しましょう」と、船大工を動員。

「よいか、洋式船体の造り方を修得せよ」船大工も洋船に興味があり、技術を手に入れた。

この造船にプチャーチンは、「此の度のご親切な扱いには感謝の言葉もない。これからは命ある限り日本のために悪いことは絶対にしてない。樺太のことは心配される必要はない」と述べたという。

造船は美談として世に伝えられ、伊豆の戸田にある「造船郷土資料館」入口に、昭和四四年友愛の像が建立され、当時はソ連なので、「日本とソ連の友好はここ戸田の港から始つた」と書き出され、その年の十二月、日露和親条約が調印された。ロシア側に感謝の気持ちがあつてスムーズに運ばれたのでしよう。プチャーチ

ンが生きていてくれたら北方領土問題もスムーズに？

和歌山でトルコの船が、暴風で沈没した時、村人たちが乗組員を救護。トルコは今もこの救護に感謝して親日の国。

一九二〇年、中国の船が暴風の

ため、尖閣列島内で難破。三人を

救護。中華民国九年五月二十日付で、中華民国駐長崎領事馮冕氏より日本に感謝状が贈られ、それには「日本帝国沖繩県八重山郡尖閣列島内和洋島承 日本帝国八重山郡石垣村雇玉代勢孫伴君熱心救護云々」とあり、尖

閣は日本の領土と中国が認めている感謝状です。

尖閣は中国の島といわないで、トルコのように感謝の気持ちを忘れな

